

経営の「こころ」を尋ねる 第25回

学校経営に限らず、本質を大切にする経営は組織を強くする



つる 衛氏 学校法人鶴学園理事長

広島修道大大学院商学研究科博士前期課程修了。米デラウェア大大学院教育学研究科博士前期課程修了。1988年鶴学園理事に就任し、同年常務理事に。副理事長を経て、2002年理事長に就任。11年から広島工業大学長を兼務する。1957年11月11日生まれ、広島市出身。

永続する企業、伸び続ける企業の経営には職人的な勘所がある。月1回連載でインタビュー。ユア一生来千鶴が、経営の「こころ」を尋ねる。

いい学校を目指した結果が経営の評価に

2016年2月に、60周年を迎える鶴学園。小学校、中学校、2つの高等学校、専門学校および大学を設置する学校法人である。

校祖である鶴虎太郎氏の「教育は愛なり」という建学の精神を継承し、現理事長である鶴衛氏の父、鶴義氏が1956年に広島高等電波学校(各種学校)として創立したのが始まりだ。

5年後、現在の佐伯区三宅の地に開学した広島工業短期大が、現在の広島工業大。当時は民家も少なく、山の中に学校をつくるには苦勞したが、「いずれこの地域には人が増える」と鶴義氏は、1年ごとに学びの場を充実させていった。銀行や地主との交渉など、それは本当に大変な仕事だった。そんな父の姿を、鶴理事長は、見て育った。

「小さい頃は、友だちのお父さんと違うところは、なかった」と言う。仕事を家庭に持ち込まない。子どもには自由にさせてくれる父だった。自身も、後継者として意識させられることはなかったが、周りの人からは、

「いつか継ぐことになるよ」と言われてきた。今思えば、父の背から学んできたように思う。物事を判断する時、迷惑を掛ける人が居るのではないか、本当にその人のためになっているのか、など表面に表れないものまで汲み取り、縁のあった人のことを後々まで、あの人は今どうしているのかと気に掛ける。「細かいところまで気配りのできる人だった」

経営をしようと思っただけではない。「いい学校をつくらうと思っただけではない。おかげで今、周りの人から、「いい学校を経営されていますね」と言ってもらい、

「経営で失敗しても、教育で失敗したくない」という父の思いが、「今やつと、分かる」と鶴理事長。その意味は、深い。

「学生のために」と決断した教育環境の整備 国内外の大学院で教育学や経営学を学び、鶴理事長が、同学園理事として就任したのは88年、30歳の時だった。

バブル期の真つただ中。建学の精神「教育は愛なり」、教育方針「常に神と共に歩み社会に奉仕する」という理念はもちろん大切だが、偏差値や、国際化、情報化など、もつと分りやすいアピールも私学にとつては必要なのではないかと、当時は思つたという。

その後、景気が悪化し、2006年、理事長として学園創立50周年を迎えた時、これからの50年について悩んだ。「私学教育の基本は、建学の精神と教育方針を教職員に浸透させ、私学らしい特色ある教育を手作りする」そして、

「社会に貢献できる人材を輩出することだ」 学校経営は、入学者数によって左右される。定員通り集まってくればは確かに重要だ。しかし、もっと大切なことは、入学した後、いかに力を付けさせ、進学・就職させることができるか。児童・生徒・学生を第一に考え、おのずとやるべきことは見えてきた。

例えば、大学における就職支援。倫理観のある、社会に貢献できる技術者を1人でも多く輩出するために、高い就職率と低い離職率の実現を目指す。学生と一対一で本人に寄り添い、希望や適性を見ながら1人ひとりに合った進路指導を行うこと。就職した後で、こんなはずじゃなかったと辞めてしまうことにならないよう、在学中から就職に対する心構えなども身に付けさせること。さらには、充実した学びの場を提供するための教育環境の整備。

09年、広島工業大構内に「三宅の森 Nexus 21」という講義棟を建設した。8000席を超える教室群を備えた講義室・演習室、瀬戸内海を一望できるスカイテリア(多目的ホール)、カフェコーナーを設けた約500席の食堂、教育学習支援センター、学生の自学自習用の場として

(第3種郵便物認可)

時代に合わせた充実を

少子化はさらに加速する。現在、18歳人口は全国120万人、年間出生者数は100万人。同学園の経営において、規模的な拡大には限界がある。しかし、そんな時代だからこそ、

「充実させていく」 例えば、高校では、夜を徹して約43kmのしまなみ海道を歩く「夜間歩行」を通して、教室の中だけでは得られない苦勞や感動を与え「人間力」を育む。

小学校では、1年生の時から英会話を楽しむ時間をとっている。文部科学省より早い、03年から始めたこの取り組みでは、広島在住の外国人から、各国の子どもたちの伝統的な遊びを学ぶ機会をつくるなど、国際的な感覚を養っている。

ほか、さまざまなオリジナル教育を実践する同学園。その根底には、校祖である虎太郎氏の「教育は愛なり」という建学の精神、そして、創立者で



ある義氏の「常に神と共に歩み社会に奉仕する」という教育方針が脈々と受け継がれていると感ぜられる。創立者も鶴理事長も、キリスト教徒だが「神」という表現にこだわってはいない。「おのおのが信じているものに置き換えればいい」と鶴理事長。

「わたしたちは生かされている」 地球そのものなのか、あるいは神様の創造物か、いずれにしても、人間ではどうにもできない、自然の力による力によって、今がある。水、空気、緑があるのも、地球だけだ。要は、大切なことに気付き、おのおのの使命を世の中のために全うする。そんな人を育てることで、鶴理事長自身がその使命を果たしているのだと、私なりに理解した。

日本にとって重要な土木、建築人材の輩出にも注力

学園創立60周年を迎える2016年、広島工業大に新たに「工学部環境土木工学科」、「環境学部建築デザイン工学科」、「工学系研究科生命機能工学専攻(大学院)」を開設する。

「土木」の名称を前面に出した学科の新設は全国的にも珍しい。土木は現場がハードで、人気のあまりない分野。取りやめた大学もある中、逆行しているように見えるかもしれないが、20年の東京オリンピック開催や大震災後の東日本の復興に向け、「日本にとって重要な分野」

「市民のために役立つ、世の中に大切な学問領域である」と鶴理事長。

また、「生命機能工学専攻」は、臨床工学技師などの医療従事者や食品科学、バイオ技術を担う人材を養成する生命学部の学びを深化させ、研究者の輩出につなげていく。鶴理事長にとっての経営とは、「人・子どもたちのために、何がで



好きな言葉は、「夢×情熱＝青春度」(サミュエル・ウルマン 新井満訳) 青春度は年齢に関係ない。夢を抱き、情熱があれば、いつでも青春である。学生たちには、「若いうちに失敗しなさい」として、

「倒れるときには、後ろ向きではなく前のめりに倒れなさい」と伝えていこうと鶴理事長。若者の未来を育む学園を背負う、その瞳の奥に、まさに青春を見た。



インタビュー・記事 牛来 千鶴 ソアラサーブス代表取締役社長。人肌感覚のクリエイティブ共同オフィス「ソアラビジネスポート」を運営。「広島に」を理念に掲げ、地場企業とのコラボ商品開発や人材育成など、地域を元気にするプロジェクトを推進している。

【主な公職】広島県総合計画審議会委員、広島市産業振興センター理事、中小企業基盤整備機構経営支援アドバイザーほか。

(第3種郵便物認可)